朗読音声のダウンロード
Audio download

★読む前に　Before you read

《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む

《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. **Start from scratch.**
2. **Don’t use a dictionary.**
3. **Skip over difficult words, phrases and passages.**
4. **When the going gets tough, quit the book and pick up another.**

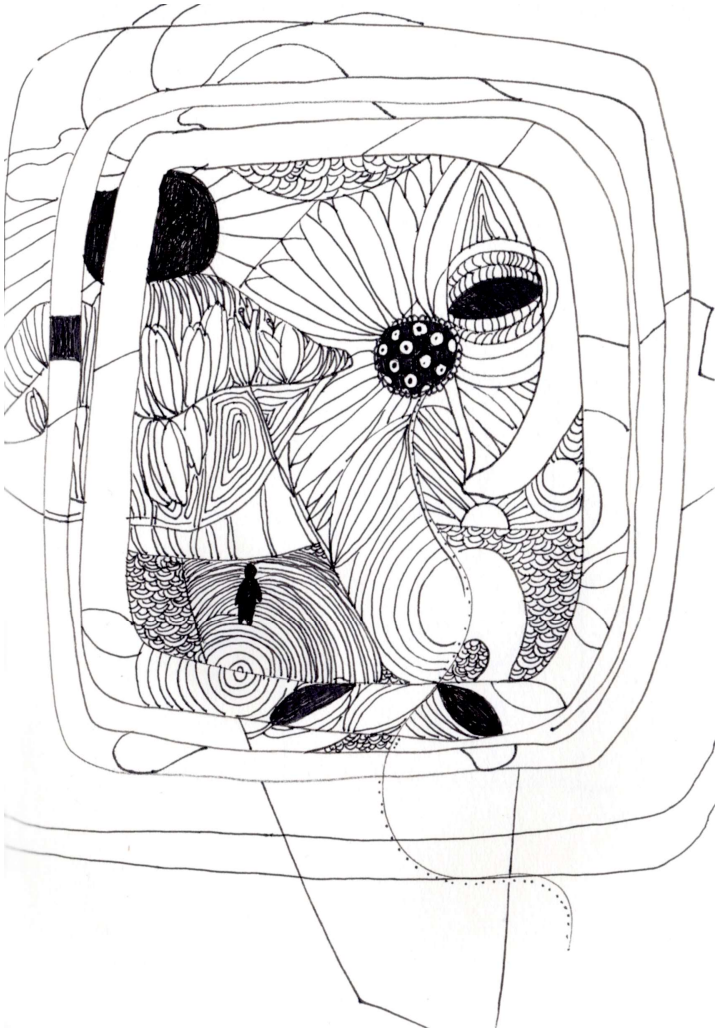
LEVEL 5 Web Tadoku Books

夢十夜（第一夜・第三夜）

原作・夏目漱石

『夢十夜』は、作家・夏目漱石が書いた十の不思議な夢の話で、神話の時代、鎌倉時代、百年後と、さまざまな時代の話が出てきます。ここでは、第一夜と第三夜を紹介します。

第一夜



こんな夢を見た。

寝ている女の枕のそばに座っていると、女が、静かな声で「もう死にます」と言う。女は髪が長く、美しい顔をしている。頬が少し赤く、唇の色も、もちろん赤い。全く死にそうには見えない。しかし、女は静かな声で、「もう死にます」とはっきり言った。私も確かに、これは死ぬと思った。そこで、「そうか、もう死ぬのか」と上から女の顔を見ながら聞いてみた。「もちろん死にますよ」と言いながら、女はぱっちりと目を開けた。大きくきれいな目で、その真っ黒な目に私の姿が映っている。

私は海のように深く見える女の黒い目を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、女の耳のそばに口を近づけて、「死ぬんじゃないだろうね、大丈夫だろうね」とまた聞いた。すると女は、やっぱり静かな声で、「でも、死ぬんですもの、しかたがないわ」と言った。

「じゃ、私の顔が見えるか」と聞くと、「見えるか、って、ほら、私の目に、あなたが映ってるじゃありませんか」と、にこりと笑った。私は黙って顔を上げた。本当に死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまた、こう言った。

「死んだら埋めてください。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして空から落ちてくる星の破片をその墓の上に置いてください。そうして墓のそばで待っていてください。また会いに来ますから」

私は、「いつ会いに来るか」と聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう。そうしてまた沈むでしょう。赤い日が東から西へ、東から西へと落ちていく間、あなた、待っていられますか」

私は黙ってうなずいた。女は静かだった声を少し大きくして、

「百年待っていてください」と言った。

「百年、私の墓のそばに座って待っていてください。きっと会いに来ますから」

私はただ「待っている」と答えた。すると、女の黒い目の中に映っていた自分の姿が、ぼうっと崩れてきた。静かな水が動いて、そこに映っていた影が崩れるように。崩れ出したと思ったら、女の目がぱちりと閉じた。涙が頬に流れた。もう死んでいた。

私はそれから庭へ出て、真珠貝で穴を掘った。貝に月の光が当たり、土を掘るたびにきらきら光った。土のにおいもした。しばらく掘ると、大きな穴ができた。私は女をその中に入れた。そうして柔らかい土を上から静かにかけた。かけるたびに貝に月の光が当たり、きらきらした。

それから私は、落ちていた星の破片を拾ってきて、土の上に置いた。胸と手が少し暖かくなった。星の破片は丸かった。長い時間をかけて落ちてくる間に、丸く

なったんだろうと思った。

私は草の上に座った。これから百年の間、こうして待っているんだなと考えながら、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の言った通り、日が東から出た。大きな赤い日だった。それがまた女の言った通り、西へ落ちた。赤いまま、落ちていった。「一つ」と私は数えた。

しばらくすると、また赤い日が上ってきた。そうして沈んだ。「二つ」とまた数えた。

私は、こういうふうに一つ二つと数えていくうちに、赤い日をいくつ見たかわからなくなった。数えても、数えても、数えきれないほど赤い日が頭の上を過ぎていった。それでも百年がまだ来ない。私は、丸い墓石を眺めて、女が嘘をついたのではないだろうかと思い始めた。

すると、石の下から、自分の方へ向かって、何かが伸びてくるのに気がついた。

それはどんどん伸びて、ちょうど自分の胸のあたりまで来て止まった。と思ったら、静かに揺れる茎の先に、真っ白な百合の花が開いた。花からは、体の芯まで届くほどの強いにおいがした。そこへ上の方からぽたりと露が落ちたので、花はふらふらと動いた。私は顔を近づけて、冷たい露のついた、白い花びらにキスをした。顔を上げた時に、思わず遠くの空を見たら、少し明るくなった空に、星が一つ光っていた。

「百年はもう来ていたんだな」と、この時はじめて気がついた。

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子どもを背中におぶっている。確かに自分の子である。ただ、不思議なことに、いつからかこの子どもは目が見えなくなっている。私が、「おまえの目はいつ見えなくなったのか」と聞くと、「昔からさ」と答えた。声は子どもの声だが、話し方はまるで大人である。

左右には田んぼがある。道は細い。暗い中に時々鳥の影が見える。

「田んぼへ来たね」と背中で子どもが言った。

「どうしてわかる？」と顔を後ろへ向けて聞いたら、

「だって鷺が鳴くじゃないか」と答えた。

すると、本当に鷺が二回ほど鳴いたので、自分の子どもではあるが、少し怖くなった。こんなものをおぶっていては、この後どうなるかわからない。どこかに捨てるところはないだろうか、と向こうを見ると、暗い中に大きな森が見えた。あそこ

ならいいだろう、と考えた時、背中で
「ふふん」と言う声がした。
「どうして笑うんだ」
子どもは返事をしなかった。ただ、
「父さん、重いかい？」と聞いた。
「重くはないよ」と答えると
「もうすぐ重くなるよ」と言った。
私は黙って森の方へ歩いていった。田んぼの中の道はまっすぐではなく、なかなか森へは近づけない。しばらくすると、道が二つに分かれているところに出た。私はそこに立って、ちょっと休んだ。
「この辺りに大きな石があるはずだ」と子どもが言った。
見ると、なるほど、目の前に大きな石がある。石には左、日ケ窪、右、堀田原と

書いてある。暗い中に、赤い字がはっきりと見えた。
「左がいいだろう」と子どもが命令した。左を見るとさっきの森の木の影が、自分たちの方へ暗く伸びていた。行くべきかどうか考えていると、
「行けばいい」と子どもがまた言った。私は仕方なく森の方へ歩き出した。心の中では、目が見えないのに何でもよく知っているなと考えながら、一本道を森へと近づいていくと、背中で、「どうも目が見えないと不自由でいけない」と子どもが言った。私が、
「だからおぶってやっているんだ。いいじゃないか」と言うと、
「おぶってもらって申し訳ないが、どうも人にばかにされていけない。親にまでばかにされるからいけない」と子どもが言う。
それを聞いて、何だか嫌になった。早く森へ行って捨ててしまおうと思って急いだ。
「もう少し行くとわかる。あれはちょうどこんな晩だったな」と、子どもは、背中

で独り言のように言っている。
私は、
「何が？」とやっと声に出して聞いた。
「何がって、父さんも知ってるじゃないか」と子どもはばかにしたように答えた。
すると、何だか自分も知っているような気持ちになった。けれどもはっきりとはわからない。ただ、こんな晩だったように思える。そしてもう少し行けばわかるように思える。わかったら大変だから、わからないうちに早く捨ててしまって、安心しなくてはならないように思える。私はますます早く歩いた。
雨はさっきから降っている。道はだんだん暗くなる。私は黙って歩き続けた。ただ、背中に小さい子どもがいて、その子どもが私の昔の事も、今の事も、これからの事も、全てわかっている。しかもそれが自分の子である。そして目が見えないのである。私は怖くてたまらなくなった。

「ここだ、ここだ。ちょうどその杉の木の下だ」
雨の中で子どもの声がはっきり聞こえた。私は足を止めた。気がつくと森の中に入っていた。そこにある黒いものは、子どもの言う通り、確かに杉の木に見えた。
「父さん、その杉の木の下だったね」と子どもが言う。
私は「うん、そうだ」と思わず答えてしまった。
「文化五年だろう」と子どもが言った。
確かに、文化五年のことだったように思った。そう思っていると、また子どもが言った。
「おまえがおれを殺したのは、今からちょうど百年前だね」
私はこの言葉を聞いて、はっきりと思い出した。今から百年前、文化五年のこんな暗い晩に、この杉の木の下で、一人の、目が見えない男を殺したということを。
そして、その時初めて、自分は人殺しだったんだな、と気がついた。そのとたんに、

背中の子が急に石のように重くなった。

夏目漱石（一八六七～一九一六年）

日本を代表する作家。明治時代（一八六八～一九一二年）から大正時代（一九一二～一九二六年）の始めにかけて、活躍しました。

東京帝国大学（今の東京大学）を卒業後、高校や大学で英語を教えていましたが、三十八歳のときに初めての小説『我が輩は猫である』、次の年に『坊っちゃん』を書き、評判になりました。四十歳で、作家の道を歩み始め、亡くなるまでの十年間に『それから』『門』『こころ』などの名作を次々に発表しました。日本が急速に近代化した時代に、個人はどう生きるべきかをテーマにしたものが多く、今でも多くの人に読まれています。

TADOKU Supporters NPO多言語多読

tadoku.org

この作品はクリエイティブ・コモンズ表示–非営利–改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。
This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/

夢十夜（第一夜・第三夜）

発行年月日：2024年2月29日

原作：夏目漱石『夢十夜』
簡約・岩崎容子
監修：NPO多言語多読
挿絵：茆一霖